



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	外国人多住地域の教育と国際交流活動：第3部 混成保育の実態と父母の意識：第8章 外国人との混成保育に関する日本人の父母の意識
Author(s)	小内, 透
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 19, 105-113
Issue Date	2002-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/22647">https://hdl.handle.net/2115/22647</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_P105-113.pdf



## 第8章 外国人との混成保育に関する日本人の父母の意識

2001年9月、われわれは大泉町で外国籍の子どもがもっとも多く通っているA保育所を対象に日本人と外国人の混成保育に対する父母の意識調査を実施した。この章では、そのうち、日本人の父母の意識について検討し、次章で外国人の父母の意識について分析を行う。

### 第1節 親子の基本属性と親子のコミュニケーション

今回、調査の対象となったA保育所には合わせて61人の日本人の子どもが通っている。彼らの父母に対するアンケート調査の結果、有効回答を得たのは42組で、全体の68.9%になる。このアンケート調査の結果から、外国人との混成保育に関する日本人の父母の意識について明らかにしていこう。

対象者が預けている子どもは、表8-1のように、男子26人、女子16人、計42人で、0歳から6歳まで各年齢に分布している。もっとも多いのは2歳児の12人（28.6%）で、もっとも少ないのは0歳児の2人である。それ以外は、各年齢に4人から9人という構成になっている。

父母の大泉居住開始年を見ると、ともに0～4年前、5～9年前が30%前後で、約6割の父母が大泉に居住して10年経っていない（表8-2）。にもかかわらず、あるいはそれゆえに、将来も大泉に住みたいと考えている者は、父母ともに4割を切っている（表8-4）。家族数は3人と4人が多く、両者合わせて66.7%になる（表8-3）。ただし、全体のうち、21.4%にあたる9家族が母子家庭である。こうして、調査対象者は、多くの場合、最近になって大泉に移り住んだ核家族であり、定住志向はそれほど高くはないと考えられる。

学歴は父母ともに高卒がもっとも多く、父が19人（57.6%）、母が24人（57.1%）と、それぞれ6割弱を占めている（表8-5）。それについて多いのが大卒の父6人（18.2%）、専門学校卒の母6人（14.3%）で、それ以外の学歴は少ない。職業について見ると、父は製造工員が8人（24.2%）、母はパート・臨時が15人（35.7%）でもっとも多く、それ以外は目立ったものはない（表8-6）。世帯年収は、800万円未満が30世帯で全体の71.4%に達する。そのうち、200万円未満が10世帯（23.8%）と全体の4分の1近くになり、低所得層の多さが目につく（表8-7）。この層はほとんどが母子世帯である。ちなみに、同じ保育所に子どもを預けている外国人の場合にも、200万円未満が18世帯中4世帯（22.2%）で、この層の厚さは国

表8-1 対象子の基本属性

種別	内訳	実数(%)
性別	男	26 ( 61.9)
	女	16 ( 38.1)
年齢	0歳	2 ( 4.8)
	1歳	5 ( 11.9)
	2歳	12 ( 28.6)
	3歳	4 ( 9.5)
	4歳	6 ( 14.3)
	5歳	9 ( 21.4)
	6歳	4 ( 9.5)
データ数		42 (100.0)

表8-2 大泉居住開始年(実数・構成比)

内訳	父	母
0～4年前	9 ( 27.3)	14 ( 33.3)
5～9年前	10 ( 30.3)	14 ( 33.3)
10～14年前	3 ( 9.1)	5 ( 11.9)
15～19年前	3 ( 9.1)	1 ( 2.4)
20～24年前	0 ( 0.0)	3 ( 7.1)
25～29年前	1 ( 3.0)	4 ( 9.5)
30～34年前	4 ( 12.1)	1 ( 2.4)
35～39年前	1 ( 3.0)	0 ( 0.0)
40～44年前	2 ( 6.1)	0 ( 0.0)
合計	33 (100.0)	42 (100.0)

表8-3 家族数

人数	実数(%)
2人	4 ( 9.5)
3人	16 ( 38.1)
4人	12 ( 28.6)
5人	8 ( 19.0)
6人以上	2 ( 4.8)
合計	42 (100.0)
うち単親	9 ( 21.4)

表8-4 大泉への定住志向(実数・構成比)

定住志向	父	母
住みたいと思う	13 ( 39.4)	15 ( 35.7)
別の場所に移りたい	6 ( 18.2)	8 ( 19.0)
必ず別の場所に移らなければならない	3 ( 9.1)	4 ( 9.5)
わからない	11 ( 33.3)	14 ( 33.3)
無回答	1 ( 3.0)	1 ( 2.4)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)

表8-5 最終学歴（実数・構成比）

学 歴	父	母
中学校	0 ( 0.0)	4 ( 9.5)
高校	19 ( 57.6)	24 ( 57.1)
専門学校	3 ( 9.1)	6 ( 14.3)
短大	2 ( 6.1)	4 ( 9.5)
大学	6 ( 18.2)	3 ( 7.1)
大学院	2 ( 6.1)	0 ( 0.0)
無回答	1 ( 3.0)	1 ( 2.4)
合 計	33 (100.0)	42 (100.0)

表8-6 職業（実数・構成比）

職 業	父	母
建設業自営	2 ( 6.1)	0 ( 0.0)
製造業自営	3 ( 9.1)	1 ( 2.4)
一般事務	4 ( 12.1)	5 ( 11.9)
公務事務	1 ( 3.0)	0 ( 0.0)
建設作業員	2 ( 6.1)	0 ( 0.0)
製造工員	8 ( 24.2)	3 ( 7.1)
セールス	1 ( 3.0)	3 ( 7.1)
理美容師	0 ( 0.0)	1 ( 2.4)
看護婦	0 ( 0.0)	1 ( 2.4)
店員	0 ( 0.0)	2 ( 4.8)
教員	0 ( 0.0)	2 ( 4.8)
管理職	3 ( 9.1)	1 ( 2.4)
パート他	0 ( 0.0)	15 ( 35.7)
内職	0 ( 0.0)	2 ( 4.8)
無職	1 ( 3.0)	1 ( 2.4)
その他	6 ( 18.2)	4 ( 9.5)
無回答	2 ( 6.1)	1 ( 2.4)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)

表8-7 世帯年収

年 収	実数( 賦)
200万円未満	10 ( 23.8)
200万円～400万円未満	6 ( 14.3)
400万円～600万円未満	6 ( 14.3)
600万円～800万円未満	8 ( 19.0)
800万円～1000万円未満	1 ( 2.4)
1000万円～1500万円未満	3 ( 7.1)
1500万円～2000万円未満	1 ( 2.4)
無回答	7 ( 16.7)
合 計	42 (100.0)

表8-8 対象子とのコミュニケーション

	内 容	よくする	時々する	余りしない	全くしない	無回答	合 計
父	平日一緒に遊ぶ	9 ( 27.3)	18 ( 54.5)	4 ( 12.1)	2 ( 6.1)	0 ( 0.0)	33 (100.0)
	休日一緒に遊ぶ	24 ( 72.7)	8 ( 24.2)	1 ( 3.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	33 (100.0)
	夕食と一緒に食べる	16 ( 48.5)	12 ( 36.4)	5 ( 15.2)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	33 (100.0)
	保育所での出来事を聞く	12 ( 36.4)	13 ( 39.4)	5 ( 15.2)	2 ( 6.1)	1 ( 3.0)	33 (100.0)
母	平日一緒に遊ぶ	19 ( 45.2)	22 ( 52.4)	1 ( 2.4)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	42 (100.0)
	休日一緒に遊ぶ	34 ( 81.0)	8 ( 19.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	42 (100.0)
	夕食と一緒に食べる	39 ( 92.9)	2 ( 4.8)	1 ( 2.4)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	42 (100.0)
	保育所での出来事を聞く	36 ( 85.7)	2 ( 4.8)	1 ( 2.4)	0 ( 0.0)	3 ( 7.1)	42 (100.0)

籍の違いを問わず共通している。

これらの親子のコミュニケーションを見ると、父母ともに比較的密に子どもと接している（表8-8）。「平日遊ぶ」「休日遊ぶ」「夕食と一緒に食べる」「保育所のことを話す」のいずれにおいても、父母ともに「よくする」「ときどきする」が80%を越えている。しかし、父と母を比べると、母の方がいずれに関しても、より密接なコミュニケーションをとっている。母の場合、すべての項目で、「よくする」「ときどきする」が90%を越え、「平日一緒に遊ぶ」以外は「よくする」が80%を越えている。

## 第2節 保育所への関わり方

調査の対象になった子どもの保育期間は、1年未満が12人（28.6%）ともっとも多いが、1年～2年未満、2年～3年未満、3年～4年未満、4年～5年未満の子もそれぞれ10%以上、存在している（表8-9）。しかし、延長保育に関しては、「延長保育なし」の子（16人、38.1%）と「週5回以上」の子（21人、50.0%）の両極に分かれる傾向がある。

このような形で子どもを預けている父母は、保育士や保育所とどのように関わっているのだろうか。その現状を見てみよう。まず、表8-10から保育士への相談内容を尋ねた結果を見ると、父親は「相談することはない」と答えた者が22人（66.7%）、無回答の者が5人（15.2%）で、相談したことがある者はほとんどいない。「これから相談したいこと」についても、相談したい内容を選択する者が多少増えるが、

表8-9 対象子の保育事情

期 間	内 訳	実数( 構成比 )
保 育 期 間	1年未満	12 ( 28.6)
	1年～2年未満	7 ( 16.7)
	2年～3年未満	7 ( 16.7)
	3年～4年未満	5 ( 11.9)
	4年～5年未満	6 ( 14.3)
	5年～6年未満	2 ( 4.8)
	無回答	3 ( 7.1)
延 長 保 育 回 数	延長保育なし	16 ( 38.1)
	週1回未満	1 ( 2.4)
	週1回～2回未満	0 ( 0.0)
	週2回～3回未満	1 ( 2.4)
	週3回～4回未満	2 ( 4.8)
	週4回～5回未満	1 ( 2.4)
	週5回以上	21 ( 50.0)
延 長 保 育 時 間	延長保育なし	16 ( 38.1)
	週1時間未満	1 ( 2.4)
	週1時間～2時間未満	2 ( 4.8)
	週2時間～3時間未満	3 ( 7.1)
	週3時間～5時間未満	1 ( 2.4)
	週5時間～7時間未満	6 ( 14.3)
	週7時間以上	8 ( 19.0)
	無回答	5 ( 11.9)
	データ数	42 (100.0)

表8-10 保育士への相談（実数・構成比）

内 訳	相談したこと		これから相談したいこと	
	父	母	父	母
子どもの育て方について	1 ( 3.0)	11 ( 26.2)	3 ( 9.1)	8 ( 19.0)
子どもの発達についての問題	3 ( 9.1)	14 ( 33.3)	3 ( 9.1)	6 ( 14.3)
保育所の保育内容について	2 ( 6.1)	11 ( 26.2)	4 ( 12.1)	5 ( 11.9)
保育士の子どもへの接し方について	1 ( 3.0)	3 ( 7.1)	3 ( 9.1)	8 ( 19.0)
外国人の親とのつき合い方について	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
子どもと外国人の子どもとの仲について	0 ( 0.0)	2 ( 4.8)	0 ( 0.0)	5 ( 11.9)
その他	1 ( 3.0)	1 ( 2.4)	1 ( 3.0)	1 ( 2.4)
相談することはない	22 ( 66.7)	9 ( 21.4)	20 ( 60.6)	10 ( 23.8)
無回答	5 ( 15.2)	4 ( 9.5)	3 ( 9.1)	6 ( 14.3)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)	33 (100.0)	42 (100.0)

「相談することはない」が飛び抜けて高い点は変わらない。これに対し、母親は多くの相談を保育士に持ちかけている。その内容は「子どもの発達について」の問題が14人（33.3%）、「子どもの育て方について」と「保育所の保育内容について」がともに11人（26.2%）である。今後相談したいことも同じような内容が上位になっている。ここから、子育てに関する悩みを抱える母親が多いことがわかる。ただし、今後相談したい内容は、全般的に少なくなる。これらの結果から、保育士への相談は母親が行うが、ある程度子育てが軌道に乗り保育所の様子がわかれば、いつまでも相談せずすまそうとする姿勢が読みとれる。それは、子育ては、母親が責任をもつものだという認識に裏打ちされていると考えることができる。

そのため、保育所の行事への出席も母親が中心になっている（表8-11）。たしかに、保育所の行事には、父親も数多く参加している。「よく参加する」「時々参加する」父親は合わせて26人（78.8%）に達している。しかし、母親はさらに多く、36人（85.7%）になる。しかも、「よく参加する」だけで見ると、父親の12人（36.4%）に対し、母親は25人（59.5%）と相当な差がある。ここから、母親中心の育児は保育所への関わり方の違いをももたらしていることがわかる。

保護者会の場合、父母ともに参加者がさらに大きく減少する。行事にはほとんどの者が参加していた母親でも、保護者会になると「よく参加する」「時々参加する」者は27人（64.3%）にまで減少する。保護

表8-11 保育所の行事や保護者会への参加（実数・構成比）

内 訳	保育所の行事		保護者会	
	父	母	父	母
よく参加する	12 ( 36.4)	25 ( 59.5)	2 ( 6.1)	12 ( 28.6)
時々参加する	14 ( 42.4)	11 ( 26.2)	6 ( 18.2)	15 ( 35.7)
殆ど参加しない	7 ( 21.2)	5 ( 11.9)	13 ( 39.4)	9 ( 21.4)
参加しない	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	12 ( 36.4)	5 ( 11.9)
無回答	0 ( 0.0)	1 ( 2.4)	0 ( 0.0)	1 ( 2.4)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)	33 (100.0)	42 (100.0)

表8-12 保護者会に対する要望（実数・構成比）（複数回答）

内 訳	父	母
時間・開催日をもっと考慮してほしい	7 ( 21.2)	9 ( 21.4)
気軽に参加できる雰囲気を作ってほしい	2 ( 6.1)	9 ( 21.4)
もっと楽しい企画してほしい	1 ( 3.0)	5 ( 11.9)
保護者会をできるだけ簡素化してほしい	4 ( 12.1)	5 ( 11.9)
今のままで問題ない	15 ( 45.5)	14 ( 33.3)
その他	1 ( 3.0)	2 ( 4.8)
無回答	4 ( 12.1)	4 ( 9.5)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)

表8-13 保育所に対する要望（実数・構成比）（複数回答）

内 訳	父	母
もっと熱心にやってほしい	5 ( 15.2)	7 ( 16.7)
保育士が少しポルトガル語を身につけてほしい	1 ( 3.0)	1 ( 2.4)
国籍の違いに対する差別のないように配慮してほしい	1 ( 3.0)	2 ( 4.8)
保育時間を長くしてほしい	8 ( 24.2)	17 ( 40.5)
保育について相談しやすくしてほしい	2 ( 6.1)	4 ( 9.5)
保育士ともっと連絡を取り合いたい	3 ( 9.1)	6 ( 14.3)
保育料をもっと安くしてほしい	21 ( 63.6)	17 ( 40.5)
とくにない	5 ( 15.2)	7 ( 16.7)
その他	2 ( 6.1)	2 ( 4.8)
無回答	0 ( 0.0)	2 ( 4.8)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)

者会に参加する父親はさらに少なく、「よく参加する」「時々参加する」が合わせて8人（24.2%）しかない。父母の参加率の差は行事よりもさらに大きくなる。それは、保護者会のあり方に一定の課題があることを示唆している。事実、保護者会に対して「時間・開催日をもっと考慮してほしい」と要望する父母、「気軽に参加できる雰囲気を作ってほしい」と望む母がそれぞれ2割程度存在している（表8-12）。しかし、保護者会への父母の参加率の低さは、それだけではなく、そもそも保護者会に対して父母の関心が薄いことにも起因している。それは、父母の参加がそれほどかまばしくないにもかかわらず、父親の45.5%、母親の33.3%が「今のままで問題ない」と答えていることに端的に示されている。

しかし、こうした事実は、決して保育所に対して望むものがないことを意味してはいない。表8-13のように、保育所に対する要望が「とくにない」とする父母は、それぞれ1割台にとどまっている。63.6%の父親が「保育料をもっと安くしてほしい」と答え、40.5%の母親が「保育料をもっと安くしてほしい」「保育時間を長くしてほしい」と訴えている。ただし、このことが保育所に対する決定的な不満になっているかという点、必ずしもそうではない。たしかに、「満足」と答える父母よりも「どちらかという満足」とする者の方が多く、前者が2～3割なのに対して、後者は5割台になる（表8-14）。しかし、「不満」とする者は母親の1人しかおらず、「どちらかという不満」を合わせても、父母ともに1割台にすぎない。父母の多くは、いくつかの要望をもっているものの、ある程度の満足感を保育所に対してもって

表8-14 保育所への満足度（実数・構成比）

内 訳	父	母
満足	10 ( 30.3)	10 ( 23.8)
どちらかといえば満足	17 ( 51.5)	25 ( 59.5)
どちらかといえば不満	5 ( 15.2)	5 ( 11.9)
不満	0 ( 0.0)	1 ( 2.4)
無回答	1 ( 3.0)	4 ( 2.4)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)

るといえる。

### 第3節 混成保育の現実

彼らが子どもを預けている保育所は、数多くの外国人の子どもを受け入れている。そのため、保育所への評価は、以上のような一般的な問題だけではなく、外国人との混成保育やそこから生まれる様々な現実に対する考え方も含めて検討しなければ、現実的なものとはならない。そこで、まず、外国人の子どもとともに過ごすことによって、子どもたちがどのように変化し、父母自身が外国人の父母とどのような関わり方をしているのか、そしてそうした現実の中で、外国人との混成保育をどのように評価しているのかを見ていこう。

まず、外国人を受け入れている保育所に子どもを預けることによって、子どもや家庭で生じた変化から見えていこう。表8-15をみると、父親の場合、「何も変わらない」が16人（48.5%）と最も多く、次いで「子どもに外国人の友達ができた」が10人（30.3%）で、「保育所を通じ外国人と親同士のつきあいをするようになった」「文化の違いにとまどうことが多くなった」「家庭でも外国人のことが話題になるようになった」という項目をあげる者は少ない。母親の場合、「子どもに外国人の友達ができた」が20人（47.6%）、「何も変わらない」が17人（40.5%）となり、両者の順位が逆転する。しかし、それ以外の点は、父親と同様な特徴をもつ。そのうち、「文化の違いにとまどうことが多くなった」と答えた父母はともに1人しかおらず、混成保育による明確なマイナスの変化を感じる者はほとんどいない。4～5割の父母は外国人との混成保育がわが子に大きな変化をもたらしていないと考えていること、変化を感じている親の場合、主として外国人の友達ができたと変化の内容として把握していること、父母とも混成保育による明確なマイナスの変化を感じる者はほとんどいないことがわかる。

表8-15 保育所に預けてからの変化（実数・構成比）

内 訳	父	母
子どもに外国人の友達ができた	10 ( 30.3)	20 ( 47.6)
保育所を通じ外国人と親同士のつきあいをするようになった	1 ( 3.0)	5 ( 11.9)
文化の違いにとまどうことが多くなった	1 ( 3.0)	1 ( 2.4)
家庭でも外国人のことが話題になるようになった	5 ( 15.2)	8 ( 19.0)
何も変わらない	16 ( 48.5)	17 ( 40.5)
その他	2 ( 6.1)	2 ( 4.8)
無回答	3 ( 9.1)	1 ( 2.4)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)

一方、外国人の保護者との直接的な付き合いについてみると、表8-16のように、父母ともに「あいさつする程度」が最も多く、父親で13人（39.4%）、母親で22人（52.4%）である。しかも、父親の場合、「全然話さない」「ほとんど話さない」も16人（48.5%）、母親の場合、8人（19.0%）である。これらを合わせると、父親が87.9%、母親が67.5%に達する。ここから、外国人の保護者とのコミュニケーションはあまり存在せず、とくに父親にその傾向が強いことがわかる。さらに、今後のつきあいについて尋ねると、さすがに「あまりつき合いたくない」とする者はおらず、「つき合わなくてもいい」とする父母も

表8-16 外国人の保護者とのつき合い

内 訳	父	母
家の行き来がある	0 ( 0.0)	1 ( 2.4)
必要な時だけ話す	4 ( 12.1)	11 ( 26.2)
あいさつする程度	13 ( 39.4)	22 ( 52.4)
ほとんど話さない	4 ( 12.1)	3 ( 7.1)
全然話さない	12 ( 36.4)	5 ( 11.9)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)

表8-17 外国人の保護者との今後のつき合い(実数・構成比)

内 訳	父	母
家の行き来ができるほど仲良くしたい	1 ( 3.0)	0 ( 0.0)
必要な時だけつき合いたい	13 ( 39.4)	22 ( 52.4)
あいさつする程度でいい	16 ( 48.5)	17 ( 40.5)
あまりつき合いたくない	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
つき合わなくていい	1 ( 3.0)	1 ( 2.4)
無回答	2 ( 6.1)	2 ( 4.8)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)

表8-18 対象子の外国人の友達

内 訳	実数( 構成比 )
いる	19 ( 45.2)
いない	4 ( 9.5)
わからない	19 ( 45.2)
データ数	42 (100.0)

表8-19 外国人の友達の概要

項	内 訳	実数( 構成比 )
国 籍	ブラジル	15 ( 78.9)
	その他	2 ( 10.5)
	無回答	2 ( 10.5)
知 識	保育所	17 ( 89.5)
	その他	2 ( 10.5)
友 の 親 と の つ き 合 い	よくしゃべる	2 ( 12.5)
	あいさつ程度	10 ( 62.5)
	あまりない	1 ( 6.3)
	まったくない	3 ( 18.8)
友 の 親 と の つ き 合 い	よくしゃべる	6 ( 31.6)
	あいさつ程度	12 ( 63.2)
	あまりない	0 ( 0.0)
	まったくない	1 ( 5.3)
データ数		19 (100.0)

表8-20 日常生活における外国人とのつき合い経験(実数・構成比)

	内 訳	経験者	うち ブラジル人
父	外国人と同じ職場で働いている	12 ( 36.4)	10
	外国人を家に招いたことがある	2 ( 6.1)	2
	外国人とレジャーを楽しんだことがある	7 ( 21.2)	4
	外国人のためのボランティアをしている	0 ( 0.0)	-
母	外国人と同じ職場で働いている	12 ( 28.4)	10
	外国人を家に招いたことがある	5 ( 11.9)	4
	外国人とレジャーを楽しんだことがある	7 ( 16.7)	5
	外国人のためのボランティアをしている	0 ( 0.0)	-

注) 1.表中の数値は各項目の経験があると答えた者の数を示す。  
2.( )内は各対象者総数に占める割合を示す。

表8-21 海外経験と外国語学習

	内 訳	父	母
海	経験あり	22 ( 66.7)	23 ( 54.8)
外 国 語 学 習	アメリカ	14	17
	ヨーロッパ	4	4
	アジア	6	5
	オーストラリア	1	0
	ブラジル	2	0
	無回答	2	3
外国語を習っている		2 ( 6.1)	1 ( 2.4)
データ数		33 (100.0)	42 (100.0)

注) 習っている外国語はすべて英語。

各1人しかいない(表8-17)。しかし、「家の行き来ができるほど仲良くしたい」と答える者は父親1人しかおらず、ほとんどの父母は「あいさつする程度でいい」「必要な時だけつき合いたい」という程度の関わり方を望んでいるにすぎない。

それは、わが子の外国人の友達の保護者に対しても同様である。親が明確にわが子の友達と認識している子は19人(45.2%)おり(表8-18)、そのうち17人が保育所で知り合い、15人がブラジル国籍の子である(表8-19)。しかし、これらの保護者に対しては、子どもに外国人の友達がいる母親の31.6%が「よくしゃべる」としているものの、父親の87.6%、母親の68.5%が「あいさつ程度」「あまりない」「まったくない」という状態である。たとえ、わが子にできた外国人の友達の保護者であっても、コミュニケーションの薄さは変わらない。

いうまでもなく、こうした傾向は、保育所をともにする外国人に対してだけでなく、日常生活全体にお

ける外国人とのつき合い方にも共通している。表8-20のように、ブラジル人を中心にした「外国人と同じ職場で働いている」者が、父親で12人(36.4%)、母親で12人(28.4%)程度存在するのみで、それ以外の場面で外国人とつき合う者は少ない。

もちろん、父母は外国ないし外国人に対して興味をもっていないわけではない。事実、父母の5～6割が海外旅行や海外勤務で海外を経験している(表8-21)。しかし、そのほとんどは、アメリカ、ヨーロッパやアジアで、ブラジルに行った経験があるのは、2人の父親だけである。しかも、ブラジル人などの流入→定住化によって「内なる国際化」が進む生活の本拠地でもブラジル人を中心とした外国人との交流が少なく、外国語もほんのわずかな者が英語を学んでいるだけである。

#### 第4節 混成保育に対する評価

それでは、このような現実の中で、外国人と日本人の子どもと一緒に保育していることについて、父母はどのように考えているのであろうか。この点を検討するため、「子どもの国際的な視野が広がる」「自分たちの子は日本人だと感じる」「日本の保育所では日本語を使うべき」「日本の保育所でも外国人の子が母国語を使うのは当然だ」「日本の保育所でも外国人のために母国の文化を教育すべき」「外国人は外国人だけの保育所へ通った方がよい」「自分の子には外国人の子と積極的に交流してほしい」「自分の子には外国人の子と深くつき合ってほしくない」という8項目について、「全くその通り」「どちらかといえばそう思う」「あまりそう思わない」の4つの尺度で尋ねてみた。その結果をまとめたのが、表8-22である。ここから、すべての項目で、回答が「どちらかといえばそう思う」と「あまりそう思わない」という中間の答えに集中していることがわかる。「全くその通り」あるいは「全くそう思わない」と答えた者が2割を越えるのは、母親の「自分の子には外国人の子と深くつき合ってほしくない」(9人、21.4%)だけで、それ以外はすべて1割台か1割未満である。

表8-22 外国人と日本人の子どもをいっしょに保育することに関する意見

	内 容	全くその通り	どちらかといえばそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	無回答	合 計
父	子どもの国際的視野が広がる	4(12.1)	18(54.5)	9(27.3)	2( 6.1)	0( 0.0)	33(100.0)
	自分たちの子は日本人だと感じる	1( 3.0)	7(21.2)	20(60.6)	5(15.2)	0( 0.0)	33(100.0)
	日本の保育所では日本語を使うべき	4(12.1)	14(42.4)	12(36.4)	3( 9.1)	0( 0.0)	33(100.0)
	日本の保育所でも外国人の子が母国語を使うのは当然だ	4(12.1)	11(33.3)	16(48.5)	2( 6.1)	0( 0.0)	33(100.0)
	日本の保育所でも外国人のために母国の文化を教育すべき	2( 6.1)	5(15.2)	24(72.7)	2( 6.1)	0( 0.0)	33(100.0)
	外国人は外国人だけの保育所へ通った方がよい	1( 3.0)	6(18.2)	22(66.7)	4(12.1)	0( 0.0)	33(100.0)
	自分の子には外国人の子と積極的に交流してほしい	5(15.2)	13(39.4)	13(39.4)	0( 0.0)	2( 6.1)	33(100.0)
	自分の子には外国人の子と深くつき合ってほしくない	1( 3.0)	6(18.2)	21(63.6)	5(15.2)	0( 0.0)	33(100.0)
母	子どもの国際的視野が広がる	8(19.0)	24(57.1)	9(21.4)	1( 2.4)	0( 0.0)	42(100.0)
	自分たちの子は日本人だと感じる	0( 0.0)	10(23.8)	24(57.1)	8(19.0)	0( 0.0)	42(100.0)
	日本の保育所では日本語を使うべき	2( 4.8)	20(47.6)	18(42.9)	2( 4.8)	0( 0.0)	42(100.0)
	日本の保育所でも外国人の子が母国語を使うのは当然だ	2( 4.8)	18(42.9)	20(47.6)	1( 2.4)	1( 2.4)	42(100.0)
	日本の保育所でも外国人のために母国の文化を教育すべき	2( 4.8)	6(14.3)	32(76.2)	2( 4.8)	0( 0.0)	42(100.0)
	外国人は外国人だけの保育所へ通った方がよい	2( 4.8)	8(19.0)	26(61.9)	6(14.3)	0( 0.0)	42(100.0)
	自分の子には外国人の子と積極的に交流してほしい	4( 9.5)	21(50.0)	15(35.7)	0( 0.0)	2( 4.8)	42(100.0)
	自分の子には外国人の子と深くつき合ってほしくない	0( 0.0)	9(21.4)	24(57.1)	9(21.4)	0( 0.0)	42(100.0)

さらに、保育所が外国人を受け入れていることに対する意見を見ても、明確に反対する父母は表8-23のように皆無である。「どちらかといえば反対」とする者も、父親で1人、母親で3人しかいない。70%弱の父母は「賛成」「どちらかといえば賛成」と答えている。その内訳をみると、たしかに「賛成」が父で51.5%、母で40.5%で、主流をしめるものの、明確に賛成とする者は約半数前後にとどまっている。また、「わからない」とする者も、父で27.3%、母で21.4%いる。つまり、混成保育に反対する者はほとんどいないが、明確に賛成する者も半数程度しかおらず、他の半数はあいまいな評価にとどまっているのが実情である。ここには、すでに見た、混成保育に関する8項目への回答結果と同様な傾向が現れている。

表8-23 保育所の外国人受入の評価（実数・構成比）

内 訳	父	母
賛成	17 ( 51.5)	17 ( 40.5)
どちらかといえば賛成	5 ( 15.2)	12 ( 28.6)
どちらかといえば反対	1 ( 3.0)	3 ( 7.1)
反対	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
わからない	9 ( 27.3)	9 ( 21.4)
無回答	1 ( 3.0)	1 ( 2.4)
データ数	33 (100.0)	42 (100.0)

しかし、こうした結果は、現実に対する判断があいまいであることを意味してはいない。むしろ、現実がプラスマイナスの両面を含む複雑な様相をもっているため、その結果、それぞれの評価が中間的なものに集中すると考えた方がよい。

事実、保育所が外国人を受け入れていることに対する評価の理由を自由回答形式で尋ねたところ、多くの父母が細かな点のプラスマイナスを指摘している。たとえば、「良い点は同じ人間だから子どもが仲良く遊んだりするのはとっても良いことだと思います。困る点はもし日本語が上手じゃなくて余り言葉が通じなかった時に喧嘩になってしまった時」((3)の母)、「子供同士は言葉の違い、文化の違いがあっても相通じるものがあり、仲良く遊ぶことができます。外国人の子どもという認識もなく国際交流することができ、また外国語を覚えるためのきっかけにもなりとても良いことだと思います。ただ大人は言葉の壁はとても厚い様に感じる」((20)の母)、「色々な言葉や文化がある事を知り、興味関心を持つことによって視野が広がり学校の授業なども熱心に取り組めるのではと思います。が教育方針や生活環境の違いから互いに疑問やとまどいもあるのも事実で余り深くつき合えないのではと思う時もあります。衛生面の不安もある」((21)の母)といった言葉にそれが示されている。文化や言葉の違いがあっても仲良くなれるし、それが興味関心や国際交流につながるといった点を積極的にとらえながら、同じく文化や言葉の違いにとまどっているのである。

しかし、外国人の大人に対する見方は、子どもたちや混成保育に関する評価と比べ、マイナスの評価が強くなる点にも注目する必要がある。この点は、すでに紹介した3人の母親の「大泉に住む外国人の評価」をみれば明らかである。(3)の母は「いい人はいいんだけど何となく怖い感じがする」と語り、(20)の母は「外国人が集団で歩いている姿を初めて見た時はとても怖いと感じました。……外国人による犯罪が増えていくのも事実だと思います」と表現する。また、(21)の母も「暗くなってからの外出や子どもの帰りが遅いときなど心配です。信号待ちで車に乗っている外人が冷やかしたり、コンビニなどで大勢で話し込んでいたりすると近くを通りづらいです。いつも不快な思いをしています」と嘆いている。子どもたちに対する評価と比べ、外国人の大人に対しては、「怖い」存在としてマイナスの見方が強くなっているのである。逆にいえば、こうした評価が混成保育に対する強い肯定感の形成を阻害し、あいまいな評価を生み出す要因になっていると考えることもできる。

以上のように、外国人の子どもを受け入れている保育園に自らの子どもを預けている日本人の父母は、外国人との混成保育について、それほど強い肯定感もそれほど強い否定感ももっていない。それは、一方で、保育園の中で子どもたちが言葉や文化の壁を乗り越えて「自然に」友達関係を形成し、他方で、外国人の大人に対するマイナスイメージが保育園の中で生じる小さな違和感を増幅させていることにもとづいていると考えられる。その背後には、少なからぬ父母が外国人と同様に、自らも比較的新しく大泉町に来住し、やがてこの町を去っていくとしようとする者も少なくないという現実がある。そのため、現状にある程度の問題があるとしても、当面子どもを預けられる場所が確保できれば、それで満足しているのかもしれない。

たしかに、彼らの体験は、この地に住み子どもを保育所に預けている時だけのものかもしれない。しか

し、その体験は、これからの日本社会が多国籍化していくことを考えると、きわめて重要な意味をもっている。それは、多国籍化する日本社会の中で、やがて確実に問題となる外国人との共生の試みを子どもの保育や日常生活の中で体験していることになるからである。こうした点から、外国人の子どもを受け入れている保育所に自らの子どもを預けている意味を改めて考え直してみることが少なからぬ意義をもつといえよう。

(小内 透)